

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前 : Norazlianah Ibrahim (ノラズリアナ・イブラヒム) (ブルネイ・ダルサラーム国)
- (2) 年 齢 : 54 歳
- (3) 参加事業 :
- 1) 第 20 回「東南アジア青年の船」事業参加青年 (1993 年)
 - 2) 第 5 回「21 世紀ルネッサンス青年リーダー招へい事業」参加青年 (2005 年)
- (4) 職 業 : ブルネイ・ダルサラーム国政府 首相官邸上席特命官



■ 参加のきっかけ

「東南アジア青年の船」事業 (以下「東ア船」という。) は、ブルネイでは大変よく知られています。パンデミックの現在も、「いつ東ア船は再開するのか?」とよく話に上がるくらいです。私は姉妹 (事後活動組織の現会長) が先に東ア船に参加しており、その次に従兄弟が参加し、「とても良かった」「絶対に勧める」という話を聞いていました。親族の中で私が 3 人目の参加者だったというわけで、いわゆる口コミでした。東ア船の募集は、文化省の広告が必ず新聞に掲載され、青少年団体にも案内されます。現在はウェブでも告知されます。1993 年当時、ASEAN 加盟国はまだ 6 カ国でしたが、私が東ア船に応募したきっかけは、他国の人と友達になり、文化や生活様式を学び、彼らの国を訪問したいと思ったからです。仲間には踊りや歌がうまいメンバーもいましたが、私は「おしゃべり」、つまりコミュニケーション力の高さを評価されたと思います。実際、東ア船の期間中も、よく司会進行役などを務めていました。

私は、幼い頃から国際関係に関心を持っていました。私の兄妹は皆、留学経験があり、帰国すると海外の音楽がかかっている、というような家庭でした。私は自然と、外国に行ってみたい、海外の人と話したい、という気持ちになっていました。1993 年、私はちょうど大学を卒業し、すでに外交官を志望していました。

■ 準備して臨んだディスカッション

東ア船の活動のひとつに、**ディスカッション・プログラム**があります。私が参加したのは「環境コース」でした。1990 年代前半は、環境保護が世界的なテーマになってきていたので、船内でこのトピックについて他国の人たちと意見交換したいと希望し、このコースを選びました。自分の意見を聞いてもらい、受け入れてもらうためには、自信を持って発言することが必要です。そのためには、ディスカッションの**テーマを徹底的にリサーチ**することも戦略の一つでした。当時はインターネットがなかったので、図書館に行き、環境のテーマについて本を読んだり記事を集めたりしました。経験から学び、自分の仕事においていかすことができました。職場でリーダーの立場を務める人に重要とされる、「**自信**」と「**細部へのこだわり**」を持つようになったのです。この 2 つの資質は、効率を高め、同僚と部下をチームとしてまとめ、調和のとれた職場を作ることに役立ちました。

文化活動も、ディスカッション・プログラムと同じく最も有益であり、ポジティブな体験でした。コミュニケーション能力の向上や、人前で話すことへの自信につながりました。この 2 つの活動を通して、他のグループの参加青年ともより多く知り合うことができましたし、違うグループの参加青年同士の関わりや連絡を取るようになりました。私は、1 つのグループに属したま

までは、学びが少なくなってしまうと考えています。人に関わるほどに学びがありますので、**知識を増やしていくために人と交流するのは必然**です。ディスカッションでは、さまざまな考えや視点を学ぶことができ、異なる教育背景を持つ参加青年と、自信を持って意見を交換することができました。文化活動では、習慣、伝統、宗教の違いについて理解を深め、感謝することができましたし、それが**相互尊重と親善につながった**のだと思います。このように、東ア船で**自然に人と出会える環境**というのは素晴らしいです。というのも、シャイな青年であっても、人と関わる以外の選択肢はないからです。頼れる家族もいませんし、ユース・リーダーもいつも手を取って横にいてくれるわけではないので、自分に頼るという方法しかないのです。

船内生活では、他国の参加者と交流しなければならない状況なため、東ア船への参加によって、**人見知りをしなくなりました**。また、自分で**より自立した考え方ができ、異なる環境に素早く適応できるようになった**と感じます。実は東ア船が終わり帰国した翌日から早速外務省勤務が始まりましたが、外務省職員である私には、多くの人脈を作り、自立し、かつ適応できることが求められるので、東ア船の経験が役立っています。

■日本の印象

事業当初の1993年、日本については文献でしか知らず、日本に対して何をどう期待して良いのかが分からない状況でした。船が日本に到着した時、とても嬉しい気持ちになりました。日本人は親切で礼儀正しく、私たち参加青年のことを知ろうととても興味を持ってくれました。岐阜県でホームステイをすることになり、秋の季節だったのですが、岐阜城に行き、紅葉が色づく景色は息をのむほど素晴らしかったです。日本での生活が初体験でしたので、お風呂の入りを事前に姉妹から聞いていたのに、「湯船は共有」ということを忘れ、張ってあったお湯を全て抜いてしまうという間違いも一度してしまいました。

日本での体験により、私はもう一度日本を訪れたいという気持ちになり、また日本の他の地域にも行ってみたいと思いました。東ア船の後、私は外務省で働くことになり、**ブルネイと日本の二国間関係を担当**したため、職務において何度か日本を訪れることができました。そして、2005年に「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい事業」に参加しました。その時もアジア太平洋が担当地域でしたので、内閣府プログラムということで私の上司も快く送り出してくれました。議論をした後に提案を出すというのがとても有意義でした。ルネッサンス事業では、岩手県盛岡市でのホームステイを体験することができました。



山本栄二駐ブルネイ特命全権大使（当時）とは、東ティモールでの任期が重なり、2021 年、公邸にお招きいただく（左から 3 番目が大使、4 番目が筆者）

■ 東ア船の延長の心持ちで外交官キャリアをスタート

東ア船は、**船内生活を共同体験するという、他とは違うユニークな機会**を与えてくれました。船上での共同生活は、短期間であっても多くのことを学ぶことができます。東ア船では、船で生活するという挑戦もありつつ、精力的に活動をこなす中で、船酔いやホームシックに負けないという意味で**忍耐力と根気強さが試されました**。もちろん寂しさや弱さを感じる時もありますが、家族に電話することもできませんし、常時人に頼ることはできないのです。その意味で、参加青年は自立すること、決断することを覚え、成長します。

東ア船の良さは、カジュアルに人と交流できる、まるで練習場（トレーニング・グラウンド）のような点です。自信をつけ、意見を発言し、他人により感謝できるようになります。外交官になった私は、東ア船で学習した環境を少し「公式」にしたという感じで、人と会うことが自然とできました。「**適応力・順応性**」「**柔軟性**」がついたと思います。「適応力・順応性」は自分のコンフォートゾーンを出た時にブレンドし、違いを楽しめること、「柔軟性」は他人の意見を取り入れ、自分の見方や意見を変えること、の 2 つを練習する場になったと思います。外交官は世界各地に駐在します。東ティモール民主共和国赴任時に、内地に行くことがありましたが、私の話す言語はバハサ語、東ティモールではバハサ・インドネシア語を話す人は多いものの、内地だと独自の言語があり通じません。そこで挨拶をすることになりました。バハサ語も英語も使えない、バハサ・インドネシア語は上手ではないが、唯一通訳とコミュニケーションできる言語となる、そんな状況で柔軟に対応することが求められます。東ア船では、青年代表として過ごしますが、それ以上に責務が課せられていることはありません。しかし職務となれば、自分の公の発言、行動に対して説明責任があります。そんな時に、自分はどう公に立ち振舞っていくかの事前練習を、東ア船ですることができたと思います。



ニューヨーク国際本部の総会に出席

■ 寄港地活動からも歴史や文化を学ぶ

寄港地活動では、施設訪問とホームステイが最も有益でした。施設訪問では、自国では体験できないようなことを学ぶことができました。私は幼少の頃から美術館・博物館が好きなのですが、東ア船でも美術館・博物館を訪問したことが心に残っています。一つの展示からいろいろなことを考えたり、その国の発展の歴史や文化遺産に関する感謝の気持ちも生まれます。**新しい洞察が得られ、新しい情報に対して心を開くことができました。**新しい知識を得たことで、もっと学びたいと思うようになりました。ホームステイでは、その国の人々と交流し、彼らの**文化や生活様式、学校の教科書には載っていないようなこと**を学ぶことができ、とても役に立ちました。異なる背景、文化、信条、人種の人々を理解し、より寛容になることができました。また、特別な家庭ではなく、一般の家庭と過ごす経験を通して、人生におけるシンプルなことに感謝し、謙虚になることができました。リーダーが**オープンで、柔軟性があり、謙虚である**ことは、部下もより好感を持ってくれるのだと思います。

■ 船では関係性が土台となる

船を使うことのメリットは非常に多く、逆にデメリットは船酔いくらいで、ほとんど思い浮かびません。船は**人と人との距離を縮める**ことに役立っています。私たちは**人と人との違いを理解し、認め合うことができる**ようになりましたし、より自信を持って、新しいことを受け入れることができるようになりました。他国の、経歴も信条も人種も異なる人たちと、一つの場所で交流することができました。彼らの文化や伝統、国の歴史や政治など、さまざまなことを学ぶことができました。船内での規則やルールに従い、私たちはより規律正しく生活すると同時に、自立心も育まれました。交渉力は船内でも培われました。例えば、ディスカッションの発言がホワイトボードに書かれるとすると、私の意見を書いてほしい、と皆思うわけで、そこで交渉します。文化活動をする時も、この場所がいい、イベントの席順もこうしたい、というのがありますから、そこで交渉スキルを発揮なくてはなりません。交渉で大切なことは、相手側が**たとえ欲しいものが手に入らなかった、一部妥協が生まれたとしても、良い気持ちで終われる**ということなので、ラポール（心を通わせること）を大切にしました。外交においてギブ・アンド・テイクは大切です。たとえばニューヨーク赴任中、国連での決議を作成する場面がありましたが、各国代表が必死になって協議します。この一単語を入れるか入れないか、というレベルで議論をしたりします。しかし相手へのラポールを

持ちながら議論を進めることで、協議が終わったら一緒にコーヒーを飲める、良い仲間であることができます。東ア船でも、国と国以外にもグループ間で交渉をする時、関係性が先にあって、議論をしていましたので、悪い結果にはなりませんでした。事業終了後も、友情は今日に至るまで続き、私たちはいつでも参加国を訪れると、既参加青年が会いに来てくれ、必要な時には助けの手を差し伸べてくれるのです。

■ 職場でのリーダーシップ発揮、経験の共有

事業終了後、私は海外 3 か国に赴任するという仕事のスタイルを続けており、自分の知識や経験を共有するのは専ら職場の同僚となります。ニューヨーク駐在中には、フィリピン既参加青年が国連の人口に関する機関で働いていましたので、人口に関して質問したい時に彼に教えてもらったことがあります。また、別のフィリピン既参加青年は、カナダで働いているのですが、ニューヨークで会ったりしました。また、ブルネイにいる時にはフィリピン、タイ、シンガポールに行った時に既参加青年やホストファミリーに会うことがあります。時折、ブルネイや国外でもチャリティー活動に参加したりしています。また、部下が職場でストレスを抱えたり、昇進したりと、人生の挑戦となるような転換期を迎えたときに、メンターとして指導しています。私は、**船内での生活とホームステイで、社会貢献の意識が高まりました**。私が交流した方々は、背景、文化、信条、人種が異なっていたので、ちがう生き方、意見、見方に対して、**よりオープンになり、理解し、感謝する**ようになりました。社会に貢献するためには、このような資質を備えている必要がありますし、それによってより**迅速に対応し、成功**することができるのです。

女性活躍の面でも、ロールモデルになられているのではないのでしょうか。

女性の社会進出という意味では、「女性の外交官は、男性の外交官と同等に、もしくはそれ以上、活躍できる」ことを証明できていると思います。女性の外交官は、細かなところに気づくと言われています。ちょうど今年の国際女性デー（3月8日）で、私はバングラデシュ大使館主催の記念イベントで、「偏見を無くそう」というテーマでパネリストを務め、私の職場でどう女性職員が活躍しているかを話します。ブルネイの外務省職員の男女比率は 50:50 ですし、男性の外務大臣を支える 4 名の事務次官（Permanent Secretary）のうち、3 名は女性、1 名は男性です。法務省も女性職員 80% です。ブルネイは男性優位社会だというステレオタイプを描かれがちですが、そのイメージを打ち破っていると思います。



バンラデシュ大使（上列左端）が発起人となった国際女性デーイベントに
パネリスト参加（筆者上列右端）

■ 既参加青年のネットワーク

友情は一度形作られたら、事業が終わっても続くと思いましたが、嬉しいことにこれは現実となり、多くの参加青年との友情は年々強まっています。主に連絡を取っているのは同期の海外青年、ブルネイ青年で、WhatsApp のグループチャットを活用して今でも連絡を取り合っています。私たちの友情とネットワークは、**門戸を開き、新しい機会を得る**のに役立っています。また、ブルネイの既参加者同士はとても仲が良く、食事をする機会が多く、その他の行事、社会活動でもよく会います。自分の同期で、孫ができたという話も聞き、時の早さを感じます。ネットワーク強化にあたっては、東ア船は長い歴史がありますので、既参加青年が世代を超えてつながるフォーラムやワークショップはいかがでしょうか。青年関連のトピックに限定し、中高年層の既参加青年と、若年層の既参加青年が話し、意見交換を促しても面白いと思います。どちらのグループもお互いから学ぶことができると思います。小さく始めて、例えば 1 グループ 12 人ずつくらい、職業もバラバラにするとよいでしょう。私は政府職員ですので、どうしても政府の意見を押ししてしまうことがありますので、そこに出席した人のさまざまなセクターをミックスした意見が出ると良いと思います。

ノラズリアナ・イブラヒム氏のプロフィール

ブルネイ・ダルサラーム国政府 首相官邸上席特命官。大学卒業後、1993 年に「東南アジア青年の船」事業に参加。その後外務省入省し、1994 年にはジャパン・デスクを担当する。2012 年から 2016 年にかけて、ニューヨークにて国際連合ブルネイ政府代表部の副代表を務める。2016 年から 2017 年、在東ティモールブルネイ大使館、特命全権大使。外務省アジア・アフリカ部門ディレクター、事務次官補（国際機関担当）を経て 2020 年より現職。2010 年、ブルネイ国王より叙勲受章（Darjah Setia Negara Brunei Yang Amat Bahagia (Loyalty)）。